

外的要素から見たラウムプランの空間構成 A Study of the Spatial Composition of Raumplan through the External Elements

岡本 佐恵子
Saeko OKAMOTO

Abstract

Modern Austrian architect Adolf Loos has been conventionally evaluated as an architect who advocates no ornamenting. However, it is reappraised recently by the technique of the "Raumplan" originated by Loos, which characteristic is emphasized in the nature of space and economical efficiency. This study aims to clarify the principle of the spatial composition of Raumplan by analyzing five works planned from 1922 to 1930 and based on Raumplan i.e. Rufer House, Tristan Tzara House, Josephine Baker House, Moller House, and Muller House, mainly from the viewpoint of the external elements.

1. はじめに

オーストリアの近代建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos 1870-1933) は、1908年に発表した論文「装飾と罪悪 (原題: Ornament und Verbrechen)」の中で、装飾がないということは、精神的な強さのしるしである¹⁾と述べ、アール・ヌーヴォーのような装飾過剰な様式を痛烈に批判し、「無装飾主義」を標榜する建築家であると認められてきた。ロースは、住宅の立面を、内部の生活を反映させるものとしてではなく、都市という外部に対して振る舞う仮面として扱っていたために、装飾の欠落した禁欲的とも言える外観を多用した。実際に、その無装飾主義は、1910年にウィーンに建てられた「シュタイナー邸 (Steiner House)」などの作品で具現化されている。ロースの建築は、オーダーなどの古典的なモチーフが用いられているように、伝統を重んじ、古典建築に依拠する面も見られるが、1920年代の機能主義、即物主義を大胆に先取りしているようである²⁾と評価されている。しかしロースは、晩年には、シュタイナー邸のような装飾の欠落した状態そのままの作品から抜けて、「ラウムプラン (Raumplan)」と称されるロース独自の建築手法をとるに到った。

ラウムプランとは、アドルフ・ロースの弟子であるハインリヒ・クルカにより紹介された空間計画の概念であり、空間性・経済性を特性として概念化されたロース独自の建築手法である。ロースは、高さという三次元固有の要素が消えないよう、あらかじめ個々の部屋をヴォリュームとして捉え、その複雑な相互貫入によって建物の全体を構成していく³⁾というプロセスを取り、高さの多様性によって空間を特徴づけた。とりわけ、後期の住宅作品に実現された諸室の立体的配列の方法がそれに該当する。ロースは、「ラウムプラン」において、住宅のなかの各空間ごとの固有の質を強調することにより (さまざまに異なっ

た天井高を容認して)、彼はすでに、ル・コルビュジェの「建築の散歩道⁴⁾」を先取りしているのである⁵⁾、と高く評価されており、ロースが、建築において、室内空間とその直接的な知覚のされ方を重視していたことが指摘されている。

1-1. 目的

従来、「無装飾主義」が評価されてきたロースであるが、近年は、「ラウムプラン」が再評価されている。2002年2月に発行された「建築文化 no.657 (彰国社)」では、ロースの建築を再考する意味で、ロースの特集が組まれた。その中には、ラウムプランに基づき計画された作品も掲載されている。しかし、「建築文化 no.657」を含め、過去の文献に見られるラウムプランに関する分析は、内部の空間構成、特にリビング及びダイニングの気積の取り方や、それらの空間における知覚のされ方についてのみ行われ、住宅の外部については殆ど触れられることがなかった。そこで、本研究では、ラウムプランにより設計されたと思われる住宅について、敷地の形状などの外的な要素に着目し、それに基づいて住宅の内部空間を分析することによって、ラウムプランの空間構成の原理を明らかにすることを目的とする。

1-2. 対象および方法

ここでは、「建築文化 no.657」の中で取り上げられた作品のうち、ラウムプランの概念に基づき計画されたと位置付けられ、1922年から1930年の間に設計された5つの作品、ルーファ邸、トリスタン・ツァラ邸、ジョセフィン・ペーカー邸、モラー邸、ミュラー邸を対象とする。

これらの住宅について、まず、設計条件などの基本的なデ

ータや、過去の文献に見られる各住宅についての分析や評価を概観し、作品を評価する視点を整理する。その上で、各住宅の敷地の形状を把握し、更に、その外部空間と内部空間とを繋ぐものとしての外階段を含めた、住宅内部における全ての階段に着目し、ラウムプランにおける外部空間と内部空間の関連性及び、階段の意味や構成について、図を用いながら分析する。

その際、前出のクルカが纏めた著作「ADOLF LOOS」の中で、クルカが、空間構成を完全に読み取るのに最も簡便な方法は、断面図と平面図を同時にじっくりと眺め、階段の方向をたどってみることである^{vi}、と記していることから、この記述に則り、断面図や模型写真も用いつつ、平面図のみでは理解しにくいロースのラウムプランについて考察を進める。

2. 各住宅の評価と外的要素から見た内部空間の分析

まず最初に、本稿で対象とする5つの住宅について、計画された年代順に、住宅に関する基本的なデータを示し、従来の分析や評価について検討する。その後、図版を用いながら、敷地などの住宅の外部における要素に着目し、ラウムプランにおける内部の空間構成についての考察を試みる。

2-1-1. ルーフア邸 (Rufer House)

ルーフア邸 (図 1) は、1922 年、ウィーンに建てられており、玄関から入り、階段を上った上階に主階、主階から更に階段を上った上階に寝室階という、ヨーロッパの伝統的な空間の構成法に基づき計画されている。

ルーフア邸は、ロースのいわゆるラウムプランが展開され始めた初期の作品の1つである。ラウムプラン初期の作品には、シュトラッサー邸 (Strasser House・1919 年・ウィーン) も挙げられているが、これら2つの住宅は、玄関入口より居間へ至る空間のシークエンスに工夫を凝らせた点について、ロースのラウムプランにおいて重要な位置を占め^{vii}ている。しかし、改築であるシュトラッサー邸に対して、新築であるルーフア邸は、目的、意味に対する空間の形成の仕方がロースの意図に沿ってより直裁になって^{viii}おり、特に、リビング及びダイニングにおける天井高の違いや空間の連続性において読み取ることができる。

具体的に、ルーフア邸に関する分析を見ると、まず構造とインテリアとがほぼ完全に分離しており、それによって内部のレベル差や壁厚、開口を自由にコントロールすることが可能になっている^{ix}ことが指摘されている。その上で、天井レベルを合わせ、付け柱の方向を一致させることで視線は連続し、一続きの空間として認識される一方、床のレベルをコントロールすることによって、身体感覚としては隔離している空間が

生み出され^x、外部空間と内部空間の乖離によって得られる内部の空間構成の自由度を最大限に生かしている点が評価されている。

2-1-2. 外的要素から見たルーフア邸の内部空間

一般的な建築におけるファサードは、外部空間と内部空間の両方に接しているというファサードの性格上、内部の生活を反映するものとして扱われている。それに対し、ロースの建築におけるファサードは、上述したように、都市に対して振る舞う仮面として扱われている。このようなロースの建築では、住宅の外部に設けられた階段が、外部空間と内部空間という異なった2空間を繋ぐ導入部としての役割を担っているものと考えられる。

ルーフア邸 (図 1-6) においては、外部空間と内部空間を繋ぐ外階段 (M-1)^{xi}は、道路側のメイン^{xii}の入口に設けられている。その外階段を上り、内部空間へ入って階段 (M-2) を上ると、2階の主階へ辿り着く。主階に設けられたリビングとダイニングには、約 800mm のレベル差があり、この2つの空間は、2階から3階へ至る階段 (M-3) によって繋がっている。同じ主階には書斎が、階段 (M-4) を上った3階には寝室が計画されている。以上に述べた部分が、この住宅におけるメインの空間である。これらの空間に関わるメインの階段は、メインの空間が計画されている1階、2階、3階を繋ぐ部分にのみ設けられている。また、リビングと隣接したテラスにも外階段 (M-5) が付加されており、この階段もメインの階段の一部として機能している。

一方、表の入口とは別に、管理人や使用人が利用するための勝手口が、敷地の低い庭園側に設けられている。ここからアプローチできる空間は、キッチン、貯蔵庫などのサービス機能を持つ空間であり、住宅においてサブの空間であると言える。使用人室はサブの空間であるが、4階に設けられているため、1階から3階へ行くために設けられたメインの階段 (M-2, M-3, M-4) を通らなければ辿り着けない。しかし、主階で最も重要なリビングとダイニングの間の腰壁を通した視線を遮らないように、動線が処理されている。また、使用人室のある4階への階段 (S-1) は、使用人のみが利用するため、他の階段に比べて急勾配で、空間を占拠しないようコンパクトに纏められている。

ここで、ルーフア邸の敷地を見る。ルーフア邸が計画された敷地には、もともと、道路側と庭園側に約 400mm のレベル差がある。しかしこの住宅の計画にあたり、敷地の高い道路側のメインの入口に、外部空間と内部空間を繋ぐ外階段が設けられており、レベル差は大きくなっている。このレベル差は、玄関から入り階段を上った2階の主階でも見られるが、ここでは、そのレベル差は、リビングとダイニングで約

外的要素から見たラウンプランの空間構成

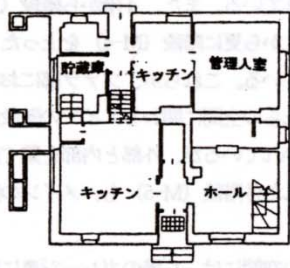


図1-1 1階平面図

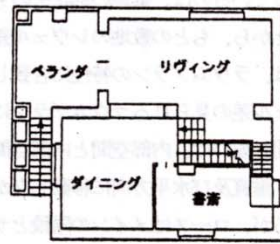


図1-2 2階平面図

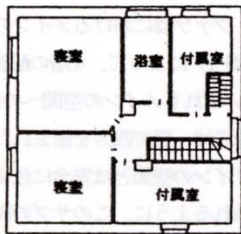


図1-3 3階平面図



図1-4 4階平面図

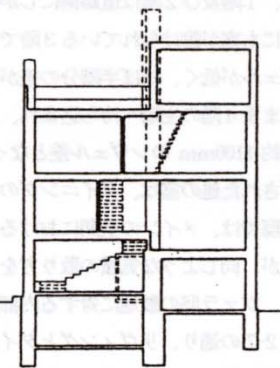


図1-5 断面図

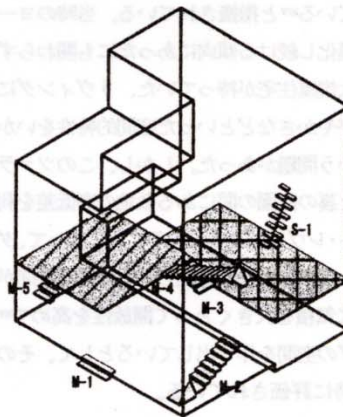


図1-6 アクソノメトリック図

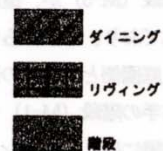


図1 ルーファ邸

800mm にまで拡大している。同じ主階に配置された他の室は、ダイニングのレベルと同じである。従来は、リビングに大きな気積を確保するために、リビングとダイニングの間にレベル差を設けていたと説明されてきたが、敷地の形状とこの 2 つの空間の関係を見ると、図 1 のように、敷地の低い側にリビング、敷地の高い側にダイニングが配置されている。従来の分析通り、リビングに大きな気積を確保することが重要であったとしても、ラウムプランが、空間性と経済性を特性としているという視点から考えると、この 2 つの空間を計画する際に最初の手懸りとなっているのは、敷地の形状そのものであると考え得る。このことから、もとの敷地のレベル差を利用したルーファ邸の計画は、ラウムプランの特性に合致している。また、各空間にレベル差の見られるラウムプランにおいては、外部空間と内部空間、或いは、内部空間と内部空間における様々なレベル差を、垂直及び水平方向に移動しながら結ぶ階段が重要となってくるが、ロースはメインの階段とサブの階段を明確に差異化させながら慎重に計画していることも理解できる。

2-2-1. トリスタン・ツァラ邸 (Tristan Tzara House)

ツァラ邸 (図 2) は、1926 年、ダダイズムの詩人、トリスタン・ツァラのためにパリに計画された。この住宅の設計にあたっては、ツァラのコレクションの保管及び展示が求められた。ロースは活動初期から「住宅は、私的博物館でなければならない」^{xiii} という考えを示していたが、ツァラのコレクションの展示ということで、その考えがより鮮明にこの住宅に現れている。

住宅の内部は、2 階のフロア全体が賃貸用として計画されている点特徴的であるが、この住宅も、玄関から階段を上って上階の主階へ進み、寝室群は更に上階へ纏めるというヨーロッパの伝統的な空間の構成法に則り計画されている。

この住宅についても、ルーファ邸と同様に、食堂と一体になったサロンのあるピアノ・ノビレ (主階) の設計にロースの関心は集中している^{xiv} と指摘されている。当時のヨーロッパの住宅は、小規模化し続ける傾向にあったにも関わらず、かつての上層階級の大規模住宅が持っていた、リビングにおける内外の空間の伸びやかさなどといった空間的特性をいかに受け継いでゆくかという問題があった。しかし、このツァラ邸においては、表通りと裏の庭園の間にある敷地の高低差を利用し、さらにスプリット・レベルを多用することによって、ダイニング、リビング、テラスという連続して配された空間が、テラスへ向けて徐々に気積を大きくとって開放性を高めて^{xv} おり、見事なリビングの空間を作り出しているとして、その空間の伸びやかさが、特に評価されている。

2-2-2. 外的要素から見たトリスタン・ツァラ邸の内部空間

ツァラ邸 (図 2-7) では、内部空間と外部空間を繋ぐものとしての外階段 (M-5) が、道路側ではなく庭園側のファサードに設けられており、ここからテラスへと接続している。メインの入口は、庭園側とは反対の道路側に設けられており、ここから入って右手の階段 (M-1) を上っていくと、4 階の主階に辿り着く。主階には、リビングとダイニングが隣接して設けられているが、2 空間のレベル差は約 1100mm あり、この 2 空間は、3 階から 4 階へ上る階段 (M-2) によって繋がっている。4 階には、ダイニングと同じレベルに婦人室及び書斎も設けられており、リビングからは外階段のあるテラスへ出られるように計画されている。また、4 階から階段 (M-3) を上った 5 階及び、そこから更に階段 (M-4) を上った 6 階は、寝室階として機能している。これらが、ツァラ邸におけるメインの空間である。これらの空間に関わるメインの階段は、最下階から最上階へと貫かれているが、外部と内部を繋ぐ庭園側のファサードに設けられた外階段 (M-5) も、メインの階段として機能している。

一方、サブの空間には、1 階のガレージ奥に設けられた階段 (S-1) を通し接続している。1 階から階段を上り、2 階を通り越して、一旦 3 階へ行き、3 階のキッチン入口に位置する階段 (S-2) を下りると、初めて 2 階へ接続することができる。2 階には、ダイニングや寝室が計画されているが、このフロアは賃貸用であり、ツァラ邸におけるメインの空間ではない。3 階からは、階段 (S-1) によって、4 階の配膳室へ、更に 5 階、6 階へと繋がり、いずれもメインの空間への接続は可能である。しかしこれらの階段は、壁で四方を囲まれた階段室という形で存在しており、メインの空間とは完全に仕切られている。また平面図から読み取れるように、このサブの階段は、面積が最小となるように最下階から最上階まで平面的に同じ位置に計画され、空間と空間を結ぶという機能のみを果たしている。

ツァラ邸の敷地を見ると、道路側と庭園側で約 4500mm のレベル差があり、ルーファ邸の敷地のレベル差に比べてかなり大きくなっている。庭園側は、3 階で室を設けられるレベルに達するため、1 階及び 2 階は道路側にしか室が設けられていない。庭園側にも室が設けられている 3 階では、庭園側の方が内部の床レベルが低く、ほぼ半階分の差がある。このレベル差は、そのまま 4 階の主階へ持ち込まれ、リビングとダイニングの間に約 1100mm のレベル差となって現れている。同じ主階に計画された他の室は、ダイニングのレベルと同じである。ツァラ邸では、メインの空間における気積の取り方が評価されているが、同じよう

外的要素から見たラウムプランの空間構成

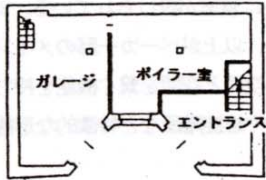


図2-1 1階平面図

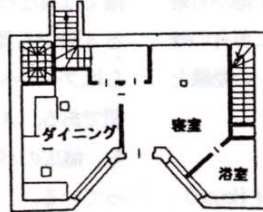


図2-2 2階平面図

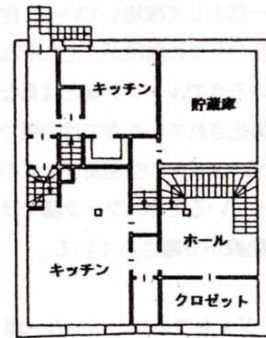


図2-3 3階平面図

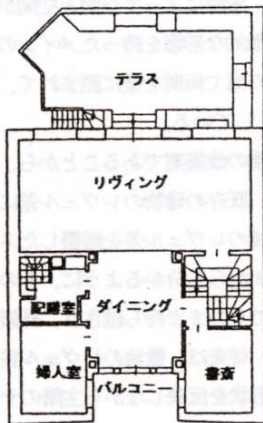


図2-4 4階平面図

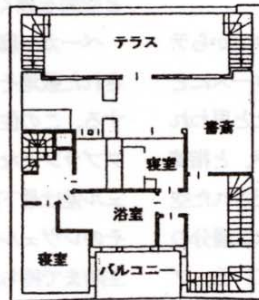


図2-5 5階平面図

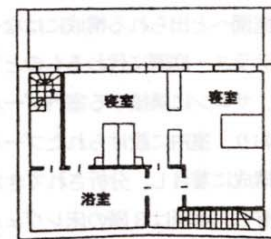


図2-6 6階平面図

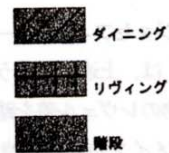
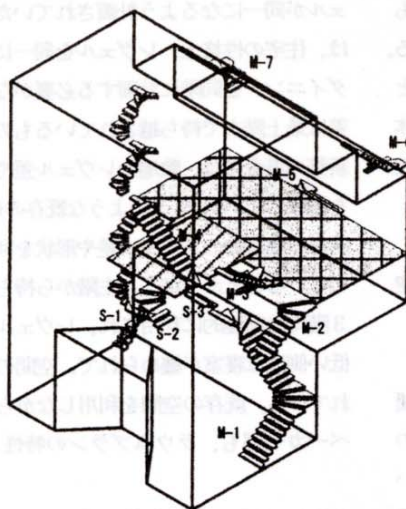


図2-7 アクソノメトリック図

図2 トリスタン・ツアラ邸

な気積の取り方をしているルーファ邸と比較して、ツアラ邸の敷地に対する内部の構成についてみて見ると、図 2-7 の通り、リビングとダイニングの配置がルーファ邸とは逆になっている。ここで注意しなければならないのは、階高を越えた敷地のレベル差は意味をなさないということである。つまり、敷地の高低によって単純にリビングとダイニングの配置が決定されるのではなく、敷地の形状が内部の空間構成に反映されつつ、敷地のレベル差に対応して、リビングとダイニングの配置が決めるのである。しかし、ツアラ邸の場合でも、敷地を手掛かりにして内部空間が構成されており、ラウムプランの特性に沿っている。また、様々なレベル差を繋ぐ階段について見ると、外階段 (M-5) は庭園側のファサードに設けられており、ここでも外部空間と内部空間を繋ぎながら、メインの空間であるテラスに関わり、メインの階段の一部として機能している。住宅内部においては、メインの階段及びサブの階段が、それぞれに最下階から最上階まで貫かれている点でルーファ邸とは異なっているが、それぞれの階段が差異化されている点では同様である。また、最下階から最上階まで、メインの空間及びサブの空間がそれぞれに専有の階段を持っているため、ツアラ邸ではより明確にメインの動線とサブの動線が分離されている。

2-3-1. ジョセフィン・ベーカー邸 (Josephine Baker House)

ベーカー邸 (図 2) は、1927 年、パリに計画された。既存の隣接した 2 棟の建築物の改築計画であったが、図面が必要な期限に間に合わず、実現はしていない。ツアラ邸が博物館的性格を備える住宅であったのに対し、この住宅は、黒人ダンサーである主人がプールでスペクタクルを繰り広げる姿を、訪問者がサロン^{xvi}から鑑賞できるという、饗宴の場としての性格を持っている。

この住宅は、ルーファ邸やツアラ邸のように、サロンからテラスや庭園へと出られる構成にはなっていないが、ロースにとって、テラス・庭園に代わるものとして意味があったと思われるのは、サロンに隣接する室内プールの設計である^{xvii}、と指摘されており、室内に設けられたプールとその周囲に配された空間との構成に着目し、分析されてきた。このプールは 2 層分の高さを有し、水面は 3 階の床レベルに合わせられている。プールを囲むようにサロンが配され、サロンからプールを眺めることは可能であるが、プールへは 3 階の寝室からしかアプローチできない。そのため、主人であるベーカーの寝室とプールとが連続し、ガラスを介して、最もプライベートな空間と最もパブリックな空間が接続するという事態が起きているのである。ここでは、ベーカーが主要な

客体となり、訪問者が見る主体となっているとして、ビアトリス・コロミーナは「眼差しの主体と客体は反転されている」^{xviii}と指摘し、この住宅が劇場的な性格を強く示す要因であると述べている。また、ベーカー邸は、1 階に入口を持ち、2 階が主階、3 階が寝室階となっているが、このようにプールが介入することで、ヨーロッパの伝統的な空間の構成法は変則的に応用されている。

2-3-2. 外的要素から見たジョセフィン・ベーカー邸の内部空間

ベーカー邸 (図 3-8^{xxx}) は、上述したように、2 棟の建築物の改築案であり、2 棟の建築物のレベル差を踏襲し計画されている。レベルの高い側にメインの入口を持ち、そこから階段 (M-1) を上った 2 階にサロンのある主階が計画されているものの、ダイニングは、主階ではなく更に階段 (M-4) を上った 3 階に計画されている。そのため、ベーカー邸のサロン及びダイニングの関係性やそのレベル差に関しては、ルーファ邸やツアラ邸のそれとは比較の対象にならない。これは、ベーカー邸において、劇場的な性格を強めたことから、サロン及びダイニングの関係性よりも、サロン及びプールの関係性に主眼が置かれたことに起因しているものと考えられる。サロンのある主階では異なったレベルにカフェが設けられ、ダイニングのある 3 階でも異なったレベルに寝室が設けられている。3 階からはプールへも接続している。以上がベーカー邸のメインの空間である。メインの階段は、空間と空間を繋ぐ機能を持ちながら、幅広のバロック的な階段や螺旋階段など特徴的な形態となっている。

既存の建築物の床レベルの低かった側には、サブの空間へと繋がる入口がある。この住宅では、サブの空間は、地階及び 1 階の床レベルの高い側にも低い側にも計画されており、同階でレベル差を持ったまま、階段によって空間と空間が繋がっている。サブの階段は、特徴的な形態を持ったメインの階段とは異なり、全て約 900mm の幅で両側を壁に囲まれて、空間と空間を繋ぐ役割のみを果たしている。

ベーカー邸は、既存の建築物の改築案であることから、計画された敷地そのものではなく、既存の建物のレベル差に着目する。この住宅は、既存の 2 棟のレベル差を踏襲したステッププランとなっており、図 3-8 から分かるように、そのレベル差は最下階から最上階までそのまま持ち越され、外観にもそのレベル差が現れている。従来は、敷地のレベル差は、主階まで持ち越され、敷地の形状を反映しながら主階のサロンとダイニングが構成され、サロンの天井を高くして気積を大きくすることによってダイニングと差異化させて、その上でサロンとダイニングの天井レベルが合わせられ、上階では床レベルが同一になるよう計画されていた。

外的要素から見たラウムプランの空間構成

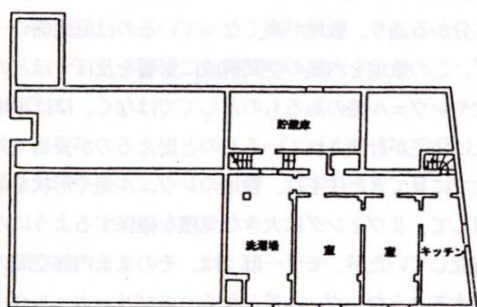


図3-1 地階平面図

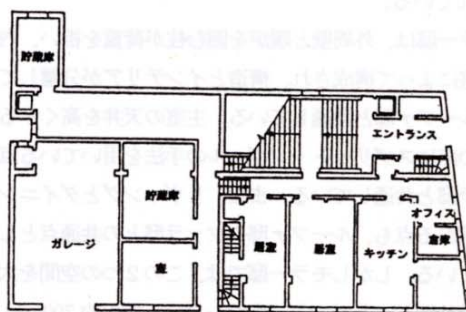


図3-2 1階平面図

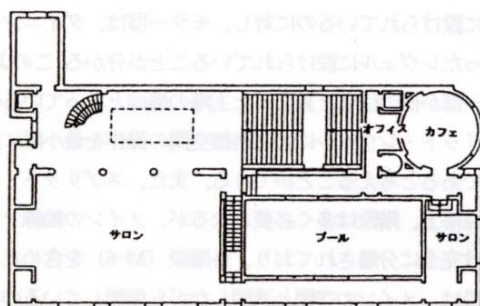


図3-3 2階平面図

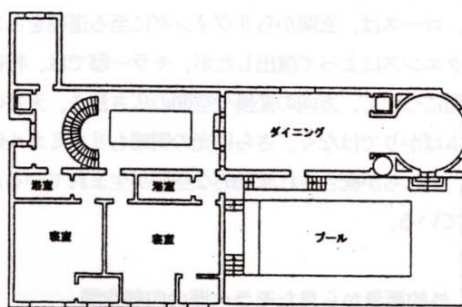


図3-4 3階平面図

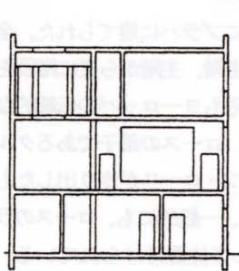


図3-5 断面図A

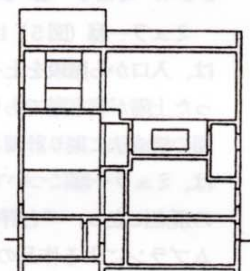


図3-6 断面図B

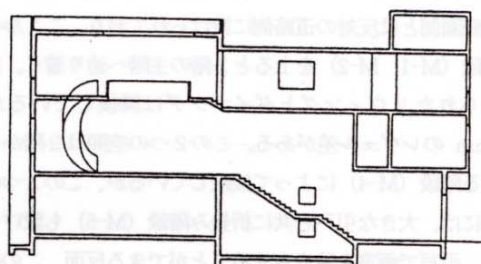


図3-7 断面図C

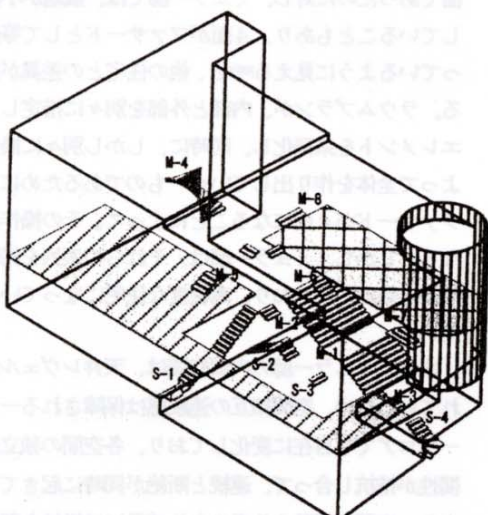


図3-8 アクソノメトリック図

図3 ジョセフィン・ペカー一部

しかし、ベーカー邸では、住宅の性格上、レベルを同一にする糸口となるサロンとダイニングを同階に計画する必要がなかったために、レベル差は最上階まで持ち越されているものと考えられる。ロースは、新築の場合には、敷地のレベル差や形状を利用して内部空間を構成していたが、このような既存の建築物の改築の場合にも、既存の建築物のレベル差や形状を利用して、内部空間を構成していることが分かる。主階から持ち越されたレベル差は、3階では積極的に利用され、レベルの高い側にダイニング、低い側には寝室が纏められて、空間の性格の違いが明確に示されている。既存の空間を利用しながら内部空間を構成しているベーカー邸も、ラウムプランの特性と合致している。

2-4-1. モラー邸 (Moller House)

モラー邸 (図 4) は、1928 年にウィーンに建てられた。全体の構成は、部屋割りが細かく階段も多く複雑化しているものの、ここでも、玄関から階段を上った上階が主階、更にはその上が寝室階、というように、ヨーロッパの伝統的な空間の構成法は維持されている。

モラー邸は、外周壁と暖炉を囲む柱が荷重を担い、内部は非耐力壁によって構成され、構造とインテリアが分離している点で、ルーファ邸と共通している。主室の天井を高くするために食堂の床にスプリット・レベルの手法を用いている点では、ツァラ邸と共通している。また、リビングとダイニングが視線で繋がる点も、ルーファ邸やツァラ邸との共通点として挙げられている。しかしモラー邸では、この 2 つの空間を大きな引戸で間仕切ることができ、またレベル差も約 700mm もあることから、両者の独立性がかなり高められている^{xx}として、ルーファ邸やツァラ邸との差異が見出されている。

また、ロースは、玄関からリビングに至る道程をさまざまなシーケンスによって演出したが、モラー邸では、特に人の歩く空間について、方向の変換や空間の広さ狭さ、天井の高低のリズムばかりではなく、さらに光の明暗もリズムカルに調節され^{xxi}、それらが統合され流動的な空間が生まれている点が評価されている。

2-4-2. 外的要素から見たモラー邸の内部空間

モラー邸 (図 4-6^{xxii}) では、内部空間と外部空間を繋ぐ外階段 (M-8) は、ツァラ邸と同様に庭園側のファサードに設けられており、ここからはテラスへと接続している。メインの入口は、庭園側とは反対の道路側に設けられており、ここから入って階段 (M-1, M-2) を上ると 2 階の主階へ辿り着く。主階に設けられたリビングとダイニングは隣接してい

るが、約 700mm のレベル差がある。この 2 つの空間は 2 階から 3 階へ上る階段 (M-4) によって接続しているが、この 2 つの空間の間には、大きな引戸と共に折畳み階段 (M-5) も設けられている。引戸で両室を独立させることができる反面、この折畳み階段でダイレクトに繋がることも可能であるため、今までに見た住宅に比べてフレキシブルな空間が形成されていると言える。同じ主階には階段 (M-3) を上ったところに書斎が設けられており、3 階から階段 (M-6) を上った 4 階には、寝室が計画されている。以上がモラー邸におけるメインの空間であり、メインの階段は、1 階から 4 階まで貫かれている。また、庭園側のファサードに設けられた外階段 (M-8) 及び、リビングとダイニングを繋ぐ折畳み階段 (M-5) も、メインの空間に関わりながらメインの階段の一部として機能している。

一方、サブの空間は、地階、1 階、及び 2 階に設けられたキッチンである。サブの空間が全て 2 階までに計画されていることから、サブの階段は、地階、1 階、2 階を繋ぐ部分 (S-1) にのみ設けられており、メインの動線とは交わらないよう配慮されている。

モラー邸の敷地を見ると、最も高い部分と最も低い部分には、約 1000mm のレベル差が見られるが、このレベル差に対応して、リビング及びダイニングが計画されていない。図 4-6 から分かる通り、敷地が高くなっているのは庭園側の一部にすぎず、この敷地を内部の空間構成に影響を及ぼすほどの敷地の形状やレベル差のあるものとしてではなく、ほぼ平坦な敷地の上に住宅が計画されているものと捉えるのが妥当であろう。今までに見てきた住宅は、敷地のレベル差や形状を最大限に利用して、リビングに大きな気積を確保するように内部空間を構成していたが、モラー邸では、そのまま内部空間の構成に影響するようなレベル差がなく、スプリット・レベルを用いることで内部に豊かな空間を作り出している。主階に着目すると、ルーファ邸とツァラ邸が、リビングのみ異なったレベルに設けられているのに対し、モラー邸は、ダイニングのみ異なったレベルに設けられていることが分かる。このように、モラー邸が他の住宅と異なった主階の構成となっているのは、スプリット・レベルによる内部空間の操作を最小限に抑えたためであると考えられる。また、スプリット・レベルの性格上、階段は多く必要となるが、メインの動線とサブの動線は完全に分離されており、外階段 (M-8) を含めたメインの階段は、メインの空間と連関しながら展開しているのに対して、サブの階段は、空間と空間を繋ぐ機能のみを担っている。

外的要素から見たラウンプランの空間構成

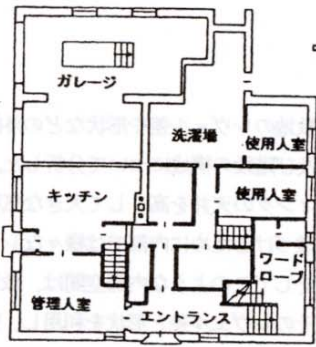


図4-1 1階平面図

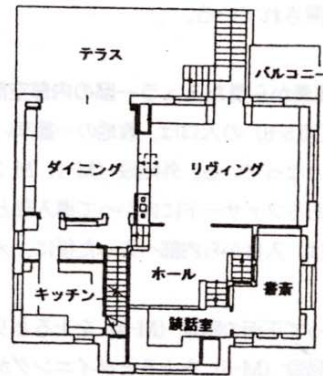


図4-2 2階平面図

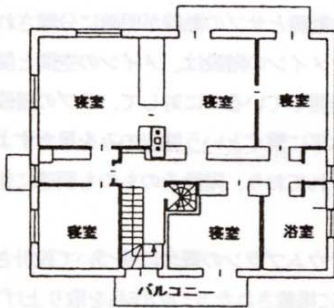


図4-3 3階平面図

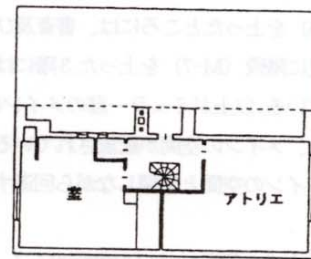


図4-4 4階平面図

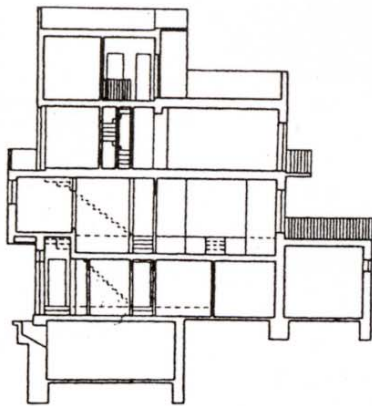


図4-5 断面図

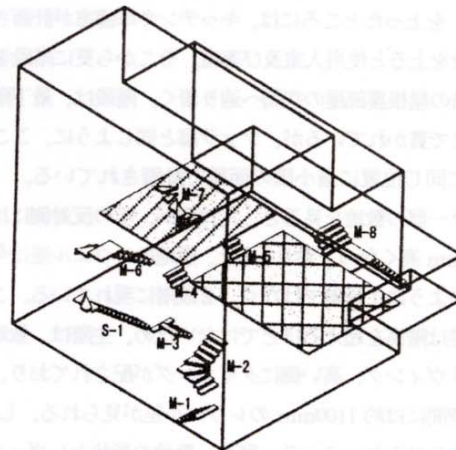


図4-6 アクソノメトリック図

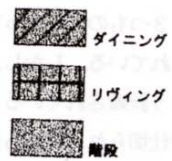


図4 モラー邸

2-5-1. ミュラー邸 (Muller House)

ミュラー邸 (図 5) は、1930 年にプラハに建てられた。全体は、入口から階段を上った上階が主階、主階から更に階段を上った上階が寝室階であり、この住宅もヨーロッパの伝統的な空間の構成法に則り計画されている。ロースの弟子であるクルカは、ミュラー邸について、「アドルフ・ロースが作り出したものの頂点に立つ」^{xxiii}と評価しており、一般的にも、ロースのラウムプランによる作品の集大成として位置付けられている。

ロースの多くの住宅では、ファサードが道路側と庭園側の 2 面であったのに対し、ミュラー邸では、敷地が小高い丘に位置していることもあり、4 面がファサードとして等価の意味を持っているように見える^{xxiv}と、他の住宅との差異が指摘されている。ラウムプランが、内部と外部を別々に措定し、それぞれのエレメントを系列化し、同時に、しかし別々に操作することによって全体を作り出していく^{xxv}ものであるために、このようにファサードが 4 面になることによって、その操作はより複雑になる。しかし、ミュラー邸は、それらの系列を同時に共存させながら処理されており、高密度な住宅になっていると評価されている。

また、ミュラー邸の内部空間は、天井レヴェルが概ね統一されているため、空間相互の連続感は保障される一方、床高は同一フロアでも自在に変化しており、各空間の独立性と相互の連関性が拮抗し合って、連続と断絶が同時に起きている。それにより、空間を経験する者の身体感覚には微妙な齟齬が生まれるとして、室内空間とその直接的な知覚のされ方について分析されており、それは特に、リビングとダイニングにおいてダイナミックに展開されている。

2-5-2. 外的要素から見たミュラー邸の内部空間

ミュラー邸 (図 5-8) の入口は、敷地の一番高い側に設けられた 1 箇所のみとなっている。外階段 (M-1, M-3) は、2 方向から、入口のあるファサードに向かって導入部として設けられている。動線は、入口から内部へ入った後に、メインとサブに分かれる。

入口から入って正面の階段 (M-4) を上るとリビングがあり、そこから階段 (M-5) を上るとダイニングがある。リビングとダイニングのレヴェル差は約 1400mm で、リビングとダイニングが異なった階に計画されたペカー邸を除き、最大のレヴェル差となっている。この 2 つの空間は、1 階から 2 階へ至る階段 (M-5) の一部によって繋がっている。ダイニングから階段 (M-6) を上ったところには、書斎及び婦人室が配置されており、更に階段 (M-7) を上った 3 階には寝室及び子供室が配置されている。以上がミュラー邸のメインの空間であり、メインの階段は、メインの空間が配

置されている 1 階から 3 階に設けられ、メインの空間と連関しながら回遊するように計画されている。

入口に入って右手の階段はサブの階段である。階段 (S-2) を下りて接続できる空間は、貯蔵庫や洗濯場などであるが、途中でまた別の階段 (S-1) も設けられており、サブの空間のみが計画された地下 1 階にもレヴェル差があることが分かる。階段 (S-3) を上ったところには、キッチンや準備室が計画され、更に階段を上ると使用人室及び客室、そこから更に階段を上ると最上階の屋根裏部屋の空間へ辿り着く。階段は、最下階から最上階まで貫かれているが、ツァラ邸と同じように、ここでも平面的に同じ位置に最小限の面積で計画されている。

ミュラー邸の敷地を見ると、入口側が、その反対側に比べて約 1700mm 高くなっており、また、敷地のレヴェル差は今までの住宅のように 1 段階ではなく、2 段階に現れている。このレヴェル差は階高を超えるほどではないため、主階は、敷地の低い側にリビング、高い側にダイニングが配されており、この 2 つの空間には約 1100mm のレヴェル差が見られる。しかし、天井は合わせられ、ミュラー邸も、敷地の形状とレヴェル差を利用して内部空間が構成されており、ラウムプランの概念に沿ったものとなっている。また、ミュラー邸では、他の住宅と違い、3 つもの階に渡ってメインの空間とサブの空間の両方が計画されている。しかし、身体的には隔離されて動線が交わらないよう計画されていると同時に、メインの空間とサブの空間は壁で仕切られ、視線も交錯しないよう配慮されている。階段については、メインの階段がメインの空間に関わりながら回遊的に計画されているのに対し、サブの階段はコンパクトに纏められており、この住宅でも、メインの階段とサブの階段は差異化されている。

3. 結び

本稿では、敷地のレヴェル差や形状などの外的要素に着目して、内部空間及び階段の構成について分析した。まず、全ての住宅で、リビングの天井を高くして大きな気積を確保するなど、空間を特徴づけるために内部では様々なレヴェル差が設けられていた。そしてこのような内部空間は、敷地にレヴェル差がある場合はそのレヴェル差と形状を利用し、敷地にレヴェル差がないとみなされる場合はスプリット・レヴェルを用いて計画されていることが指摘できる。これは、いずれも空間性と経済性を特性とするラウムプランの概念に基づいた計画であると理解することができる。次に、階段を詳細に分析することによって、メインの動線とサブの動線が明確に分離されていることが指摘できる。メインの階段は、メインの空間と関わり合いながら回遊的に展開しているのに対

外的要素から見たラウムプランの空間構成

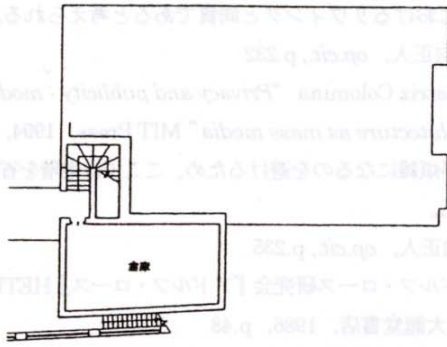


図5-1 地下2階平面図

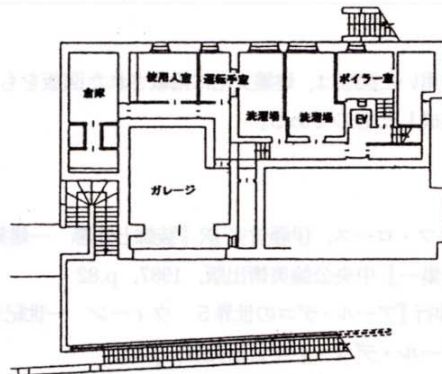


図5-2 地下1階平面図

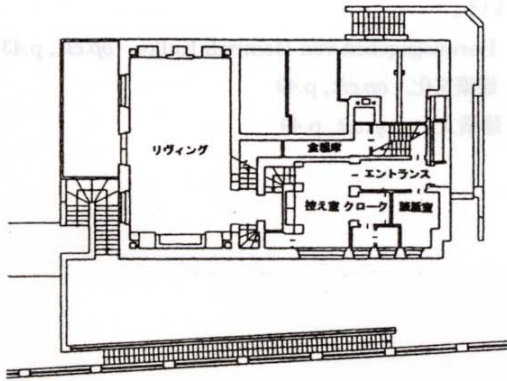


図5-3 1階平面図

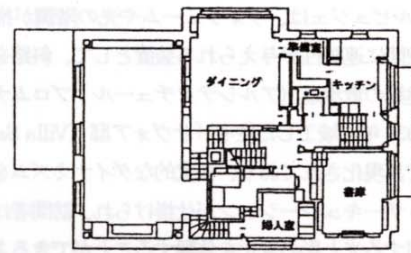


図5-4 2階平面図

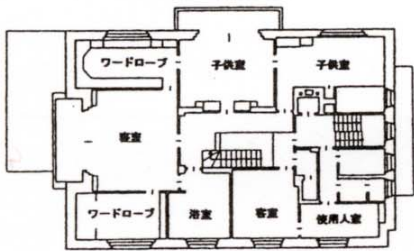


図5-5 3階平面図

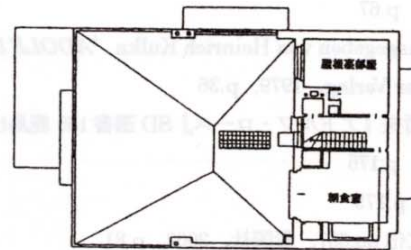


図5-6 4階平面図

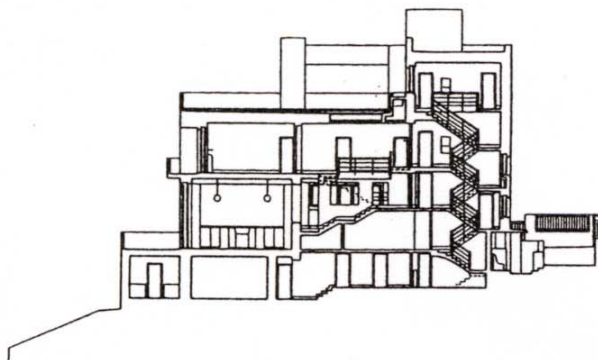


図5-7 断面図

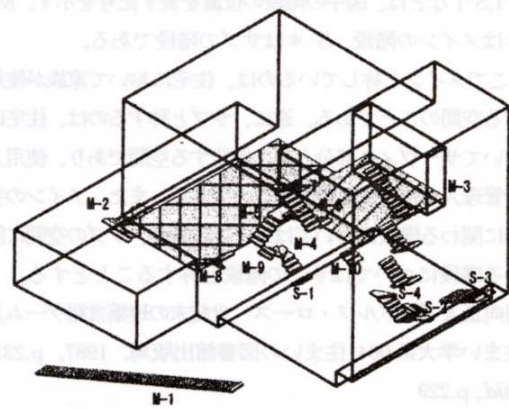


図5-8 アクソノメトリック図

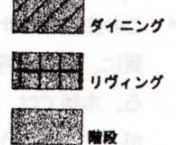


図5 ミュラー邸

して、サブの階段はサブの空間を垂直及び水平に繋ぐという機能のみを果たすように最小限の空間に計画されており、階段そのものも明確に差異化されているのである。

本稿では、ラウムプランの概念に基づいて設計された住宅のうち、建築文化に掲載された5つの作品を取り上げて考察した。ラウムプランに基づき計画された残りの住宅については、今後の研究の課題としたい。

図版：

本稿で用いた図版は、建築文化に掲載された図版のもとに、筆者が作成したものである。

註：

- ⁱ アドルフ・ロース, 伊藤哲夫 訳『装飾と罪悪 — 建築・文化論集—』中央公論美術出版, 1987, p.82
- ⁱⁱ 千足伸行『アール・デコの世界5 ウィーン — 世紀末都市のアール・デコ—』学習研究社, p.68
- ⁱⁱⁱ 20世紀建築研究編集委員会『20世紀建築研究』INAX出版, 1998, 07-09
- ^{iv} ル・コルビュジェは、ヴォリュームや光の階調が推移展開し、空間に連続性が与えられる装置として、斜路を多用した。建築の散歩道（アルシテクチュール・プロムナード）は、1931年に竣工した住宅「サヴォア邸（Villa Savoya）」などで具現化されており、視覚的なダイナミズムを誘発するようサーキュレーションが仕掛けられ、訪問者は、視界に展開する光と影の変化を体験することができるようになっている。
- ^v ジェラルド・モニエ, 森島勇 訳『二十世紀の建築』白水社, 2002, p.67
- ^{vi} Herausgegeben von Heinrich Kulka “ADOLF LOOS” Löcker Verlag, 1979, p.36
- ^{vii} 伊藤哲夫『アドルフ・ロース』SD選書165 鹿島出版会, 1980, p.175
- ^{viii} Ibid., p.175
- ^{ix} 建築文化 no.657, 彰国社, 2002, p.81
- ^x Ibid., p.81
- ^{xi} M-1, S-1などは、図中の階段の位置を表す記号を示す。M-*はメインの階段、S-*はサブの階段である。
- ^{xii} ここでメインと称しているのは、住宅において家族が使用する空間のことである。逆に、サブと称するのは、住宅においてサービス部分として機能する空間であり、使用人や管理人が使用する空間のことである。また、メインの空間に関わる階段についてはメインの階段、サブの空間に関わる階段についてはサブの階段と称することとする。
- ^{xiii} 川向正人『アドルフ・ロース 世紀末の建築言語ゲーム』住まい学大系004 住まいの図書館出版局, 1987, p.231
- ^{xiv} Ibid., p.229
- ^{xv} 建築文化, op.cit., p.83
- ^{xvi} この住宅でのサロンは、家族のためのリビングという性質に、客を接待するための空間という性質が加味されている。本稿では、この住宅に限りサロンという言葉を用いるが、ここで言うサロンは、本稿で扱うロースのその他の住宅におけるリビングと同質であると考えられる。
- ^{xvii} 川向正人, op.cit., p.232
- ^{xviii} Beatriz Colomina “Privacy and publicity : modern architecture as mass media” MIT Press, 1994, p.260

^{xix} 図が煩雑になるのを避けるため、ここでは地階を省略している。

^{xx} 川向正人, op.cit., p.235

^{xxi} アドルフ・ロース研究会『アドルフ・ロース』HETERO : 1, 大龍堂書店, 1986, p.48

^{xxii} 図が煩雑になるのを避けるため、ここでは地階を省略している。

^{xxiii} Herausgegeben von Heinrich Kulka, op.cit., p.43

^{xxiv} 建築文化, op.cit., p.49

^{xxv} 建築文化, op.cit., p.49

(提出期日 2003年3月5日)